

幼少期の自然体験と環境に関する意識調査  
－保育者養成校の学生へのアンケート調査を基に－

Survey on Childhood Nature Experiences and Environmental  
Awareness :

Based on a Questionnaire Survey of Students at a Child Care  
Training School

椋田 善之\*

馬場 住子\*

Yoshiyuki MUKUDA

Sumiko BABA

## 抄 録

小中学生の自然体験は年々減少していることが報告されている。そのような中、幼少期の自然体験などが自己肯定感や自立的行動習慣、探究力、コミュニケーション能力などに影響していることが明らかになっている。しかし、幼少期の自然体験の機会を設けることの重要性を各家庭が認識し、自然体験を積極的に取り入れようとする意識については、小中学生の自然体験が年々減少している現状があるということからもあまり高くないことが予想される。そのような中、これから保育者になろうとしている学生は特に、自然体験の重要性を認識し、保育環境にどのように取り入れていくかについて、見通しを持ち、その必要性についても認識を高めていくことが求められているといえる。

本調査の結果、幼少期の居住環境や幼少期に「野菜や米」を育てた経験は学生になった際、子どもにどのような経験をさせたいかという思いに影響していることが明らかになった。自然体験が減少している昨今、自然体験への思いをより強く持ってもらうためには、居住環境や自然体験に着目し、体験が少ない学生には特に、実際に自然体験をしてもらうことや、その重要性を伝えていく必要があることが示唆された。

## 1. 研究の背景と目的

これまでに独立行政法人国立青少年教育復興機構の調査(2009年全国の小中高校生18,800人から回答を得た調査では、青少年の自然体験や生活体験の実態および青少年の自立的行動習慣と自然体験、生活体験、お手伝いとの関係を分析、過去の調査との経年比較を行っている)では、虫取りや海・川で泳ぐといった自然体験のある小中学生が調査の前10年間で大幅に減っていることが示されている。また、社会経済的背景の相違に関わらず、自然体験や生活体験、文化芸術体験が豊富な子ども、お手伝いを多く行っている子どもは、自己肯定感が高く、自立的行動習慣や探究力が身についている傾向があり、幼少期に動植物と触れ合った経験などが豊富な高校生ほど、思いやりの心がありコミュニケー

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

ション能力が高い傾向にあることが明らかになっている。さらに、就学前から子どもの外遊びを奨励する保護者の働きかけに注目すると、その後の探究力の向上に肯定的な影響を及ぼすことや、外で過ごす時間の長さが、子どもの肥満と近視傾向の抑制につながる可能性があることも示唆されている。

その他の先行研究として、山本(2012)は大学生 429 人への質問紙調査の分析結果から、幼少期の自然体験として、ままごと・かくれんぼ(80%)、ごっこ遊び(67%)・基地づくり、野山遊び(52%)という回答が多く、男女別比較では男子学生は昆虫採集(60%)、魚釣り・沢遊び(55%)、昆虫の飼育(40%)の回答が女子学生より多く見られ、女子学生では、ままごと・かくれんぼ(90%)、草花遊び(67%)、野山遊び(57%)、植物の栽培(51%)、ハイキング・登山(33%)、クラフト(33%)の回答が男子学生より多く( $p < 0.01$ )見られた。また、幼少期の自然体験と大学生の社会性(共感および社会的スキル)には関連が見られ、特にごっこ遊び・基地づくり(33%)、草花遊び、ハイキング・登山、キャンプでは想像性、共感性、視点取得、社会的スキルで有意な関係が見られた。そのことから、幼少期の自然体験で得た経験は、学生の心に残りその後の行動に影響を与え、社会性はキャンプのような非日常の体験ばかりではなく、自然を媒介とした家族や友だちとの日常的な関わりの中でも育まれたと述べている。

また、高橋ら(2010)による 10 代から 60 代を対象とした調査では、幼少期における日の出や日の入り、うろこ雲や入道雲、夜空の星を見た自然体験が、自然科学への関心や自然に対する心情と相関関係があることが明らかにされている。さらに、遠藤ら(2019)の研究からは、学生の心が動く原体験として最も多く言及されていたことは、キャンプや林間学校であったことが示されている。さらに、千葉ら(2020)は幼児教育を学ぶ大学生を対象とした調査において、学生は幼少期に育てた植物としてアサガオ(69%が回答)やさつまいも(21%が回答)などの植物栽培を含む自然との触れ合いを体験しており、自然体験が子どもたちに与える影響について尋ねたところ、感性、自然への興味や楽しさ、豊かな感情、優しい気持ち、命の大切さ、自然の美しさなどの回答が見られたことから大学の講義内でも積極的に自然と関わる機会を増やすべきであるとしている。

そして、前迫(2004)の奈良県内全保育所に対する質問紙調査では、「子どもが自然環境に親しみ、生物のしくみの不思議さや生命の育みを感じることは保育にとって大切か」という質問に対して「とてもそう思う」の回答が 87.0%となっており、「自然とかがわる活動を実施するにあたって、保育士養成校に望んでいること」に対する自由記述についても 58.7%であったことから、養成校の自然活動に対する取り組みに関心があることを明らかにしている。

以上にある通り、これまでの研究では、幼少期の自然体験がその後にもたらす影響について様々な角度から明らかにされてきた。また、これから多くの子どもたちを育てていくことになる学生が所属する保育者養成校においても、学生の自然体験の重要性についても明らかにされている。

しかし、これまでに幼少期の自然体験が子どもたちに自然体験をしてほしいと思うかという学生の意識に影響しているかについて明らかにした研究は見当たらない。

それらを踏まえた上で、本研究では保育者養成を行う K 大学において 2023 年度に在学している学生の幼少期の自然体験の頻度に着目し、質問紙調査を行うことを目的とする。

そして、その結果を基に、幼少期の自然体験とその後の意識について考察する。また、本調査の結果を踏まえ、保育・教育における自然体験の重要性を改めて捉え直し、保育・教育方法を具体的に学ぶ「子どもと環境」において、今後どのような授業が望まれるかを示唆する知見を得たい。

## 2. 研究方法

(1) 調査対象：K 大学 教育学部 2 回生 「子どもと環境」の履修者 38 名

(2) 調査時期：2023 年 6 月（回収率 100%）

(3) 質問紙調査の質問(項目)内容

1. 学年

2. 幼少期に居住していた地域の様子(周りに山や川、田んぼなどがあり自然に囲まれた地域であったかなどの項目より選択)

3. 幼少期に体験した内容について(その頻度を 4 件法で選択)

①海や川で遊んだり泳いだりした

②夜空に輝く星をゆっくりと見た

③野鳥の鳴き声を聞いたり野鳥を見た

④昆虫をつかまえた

⑤山菜やキノコなどを採った

⑥貝を採ったり魚を釣ったりした

⑦太陽の昇るところを沈むところを見た

⑧大きな木に登って遊んだ

⑨キャンプをした

⑩登山やハイキングをした

⑪草花を育てた

⑫野菜やコメを育てた

⑬生き物(動物以外)を飼っていた

⑭動物を飼っていた

⑮果物などを収穫した

4. ①～⑮の経験を子どもたちにも経験してほしいと思うか(それぞれに回答)

5. その他の自然体験(自由記述)

6. (自分自身について)コミュニケーション能力が高いと思うか  
(思う度合いを 4 拓より選択)

7. 幼少期の自然体験時に感じたこと、特に印象に残っていること  
(ある場合は自由記述)

8. 幼少期の自然体験を振り返って、現在の生き方や考え方などに影響していることがあるか(ある場合は自由記述)

9. 幼少期の自然体験は必要か(現在の考えを 4 択から選択)

10. 自然体験として現代の子どもたちにも体験してほしいと思うことはあるか  
(ある場合はどのようなことかを自由記述)

11. 施設(園庭を含む)で、してみたいと思う環境構成(自由記述)

質問項目の体験項目については独立行政法人国立青少年教育復興機構の調査項目を参考に作成し、独立行政法人国立青少年教育復興機構にもその旨の許可を得た。その項目に加えて、体験を子どもたちにもしてほしいと思うか、幼少期の自然体験時に感じたこと、印象に残っていること、体験が現在の生き方や考え方に影響していると思うか、幼少期の自然体験として子どもたちに体験してほしいと思うこと、については、保育者を目指す学生としての考えを尋ねる項目として筆者らが必要であると考え、新たに加えた。特に今後学生が保育所・幼稚園・認定こども園(または小学校・児童養護施設・障害児施設・乳児院など)に実習に行くことを前提として、就学前施設の環境を考える項目も取り入れることとした。

- (4) 倫理的配慮：執筆者の大学の倫理審査委員会の承認を得ている。(承認番号 R5-7)さらに、調査対象者には質問紙についての説明を口頭で行い、自由意志による回答であることを伝えた。回答は WebClass の QR コードを読み取り、各自で回答を行うよう依頼した。調査紙の 1.~7. には研究の趣旨、答え方、情報の管理方法、無記名質問紙であり、回答をしなくても一切不利益はないことなどを明記した。
- (5) 分析方法：本分析の統計処理を行うに際しては、使用方法が簡便でフリーソフトであることから HAD15.0(清水 2016)<sup>1)</sup>を採用した。本研究ではこの HAD15.0 を用いて、要約統計量と各項目間でクロス修正を行い、併せて X<sup>2</sup> 検定を行った。また、水準 0.05 で有意な差があった項目については、どの項目で有意さが明らかになっているかを確認するため残差分析を行い、表に示している。なお、統計的に有意な差が出た項目は多くあったため、育った環境と経験してほしいことを明らかにする項目に今回は着目し、示している。

また、自由記述の分析については、記述の傾向を見るために無料のテキストマイニングソフト KH Coder<sup>2)</sup>を使用し、「共起ネットワーク」から分析を行い、よく出現している語とそのつながりに着目することで、自由記述の回答傾向を読み解くことを目的とした。

### 3. 研究結果と考察

#### 3. 1 居住環境と幼少期における野菜や米を育てる経験の有無

今回の質問紙調査に対する回収率は 100%であった。その結果から、幼少期の居住環境による自然体験の経験の違いを明らかにしつつ、その後の意識にもたらす影響などについて示していく。

表 1 の通り、「あなたが幼少期に居住していた地域の様子を教えてください」という質問に対して、「周りに山や川、田んぼなどが多くあり自然に囲まれた地域に住んでいた」と回答し、「野菜や米を育てた」という質問に対して、「とてもある」と回答した学生は有意に多く、「少しある」と回答した学生は有意に少ない傾向が見られた。一方、「あなたが幼少期に居住していた地域の様子を教えてください」という質問に対して、「周りに山や川、田んぼがそこそこあり、ある程度自然に触れられる地域に住んでいた」と回答し、「野菜や米を育てた」という質問に対して、「少しある」と回答した学生は有意に多く、

「とてもある」と回答した学生は有意に少ない傾向が見られた。つまり、居住環境が自然に囲まれた環境である場合、野菜や米を育てる経験は「とてもある」が、居住環境があまり自然に触れられない場合、「少しある」程度になるということが明らかになったといえる。自然に囲まれた地域に住んでいる場合、野菜を育てる環境が近くにあり、家庭でも農業を営んでいる可能性がある。このような地域の環境から今回の回答傾向になったことも考えられる。

表1 幼少期の居住環境と幼少期の野菜や米を育てる経験の有無のクロス表

変数	出現値	野菜や米を育てた											
		とてもある			少しある			あまりない			全くない		
		残差	p値	残差	p値	残差	p値	残差	p値	残差	p値	残差	p値
あなたが幼少	周りに山や川、田んぼなどが多くあり自然に囲まれた地域に住んでいた	△7	2.840	.005	▼1	-2.590	.010	1	0.379	.704	0	-0.824	.410
期に居住してい	周りに山や川、田んぼがそこそこあり、ある程度自然に触れられる地域に住んでいた	4	-0.120	.904	5	-0.253	.800	0	-1.175	.240	△2	2.235	.025
た地域の様子	周りに山や川、田んぼなどはあまりなく、あまり自然に触れられない地域に住んでいた	▼1	-2.564	.010	△9	2.222	.026	2	1.321	.186	0	-1.007	.314
を教えてください	周りに山や川、田んぼなどほとんどなく、自然に触れられない地域に住んでいた。	2	0.107	.915	3	0.546	.585	0	-0.714	.475	0	-0.575	.565

### 3. 2 居住環境と子どもたちの野菜や米を育てる経験に対する必要性

表2では、幼少期に居住環境が「周りに山や川、田んぼなどが多くあり自然に囲まれた地域に住んでいた」と回答した学生は「あなたは、「野菜や米を育てた」経験を子どもたちにも経験してほしいと思いますか？」という質問に対して、「とてもそう思う」という回答が有意に多く、「少しそう思う」という回答は有意に少ない傾向が見られた。つまり、居住環境自然に囲まれた場所である場合、野菜や米を育てる経験の必要性に影響を与えるといえ、幼少期に自然に囲まれた居住環境に暮らしている場合、子どもたちにも野菜や米を育てる経験をしてほしいという思いが強くなるといえる。これまでの先行研究から考察すると幼少期の居住環境によって自然体験の機会が多くあり、その体験が基盤となり、子どもたちにも同じ経験をしてほしいと思うという可能性が考えられる。そこで、次に「野菜や米を育てた」経験頻度と「子どもたちにも経験してほしいと思いますか？」という質問に対する回答を見ていくことにする。

表2 幼少期の居住環境と子どもたちが野菜や米を育てる経験の必要性のクロス表

変数	出現値	あなたは、「野菜や米を育てた」経験を子どもたちにも経験してほしいと思いますか？					
		とてもそう思う		少しそう思う			
		残差	p値	残差	p値	残差	p値
あなたが幼少	周りに山や川、田んぼなどが多くあり自然に囲まれた地域に住んでいた	△8	2.067	.039	▼1	-2.067	.039
期に居住してい	周りに山や川、田んぼがそこそこあり、ある程度自然に触れられる地域に住んでいた	5	-1.129	.259	6	1.129	.259
た地域の様子	周りに山や川、田んぼなどはあまりなく、あまり自然に触れられない地域に住んでいた	8	0.619	.536	4	-0.619	.536
を教えてください	周りに山や川、田んぼなどほとんどなく、自然に触れられない地域に住んでいた。	1	-1.932	.053	4	1.932	.053

### 3. 3 幼少期の野菜や米を育てる経験とその後に感じる必要性

野菜を育てた経験は同じ経験を子どもたちにも経験してほしいと思う要因になっている

のであろうか。このことを明らかにするため、「野菜や米を育てた」という質問と「あなたは、「野菜や米を育てた」経験を子どもたちにも経験してほしいと思いますか？」という質問の回答の傾向を探る。その結果、表3の通り「野菜や米を育てた」という質問に対して「とてもある」と回答し、「あなたは、「野菜や米を育てた」経験を子どもたちにも経験してほしいと思いますか？」という質問に対して「とてもそう思う」と回答した学生は有意に多く、「少しそう思う」と回答した学生は有意に少ない結果となった。つまり、幼少期に野菜や米を育てる経験がとてもある場合、その後と同じ経験を子どもたちにもしてほしいと思いが強くなる要因になるといえる。つまり、山本（2012）が幼少期の自然体験で得た経験がその後の行動に影響を与えるということを示している通り、本研究においても、幼少期の野菜や米を育てる経験がとてもある場合、子どもたちにも同じ経験をしてほしいと思うということに影響を与えていると考えられる。

表3 野菜や米を育てた経験と子どもたちへの経験必要性のクロス表

変数	あなたは、「野菜や米を育てた」経験を子どもたちにも経験してほしいと思いますか？						
	出現値	とてもそう思う	残差	p値	少しそう思う	残差	p値
野菜や米を育てた	とてもある	△ 13	2.662	.008	▼ 2	-2.662	.008
	少しある	8	-1.924	.054	10	1.924	.054
	あまりない	1	-1.004	.315	2	1.004	.315
	全くない	1	-0.313	.754	1	0.313	.754

### 3.4 居住環境と子どもの自然体験の必要性

次に、居住環境はそもそもの幼少期の自然体験の必要性に影響しているかどうかについて明らかにするため、「あなたが幼少期に居住していた地域の様子を教えてください」という質問と「現在のあなたの考えをお聞かせください。幼少期の自然体験は必要でしょうか？」という質問に対する回答の傾向を探る。表4の通り、「あなたが幼少期に居住していた地域の様子を教えてください」という質問に対して「周りに山や川、田んぼなどはあまりなく、あまり自然に触れられない地域に住んでいた」と回答し、「現在のあなたの考えをお聞かせください。幼少期の自然体験は必要でしょうか？」という質問に対して「とても必要だと思う」と回答した学生は有意に多く、「少し必要だと思う」と回答した学生は有意に少ないという傾向が見られた。つまり、居住環境に自然環境がほとんどなく、自然に触れられない地域にいた場合、自然体験の必要性への強い思いはあまりなく、少し必要だと思う程度であった。これからを担う学生に自然体験の必要性を強く持つてもらうためには、幼少期の居住環境が影響しているといえ、今後は幼少期の居住環境を把握することによって伝え方を変化させていくことが求められているといえる。

表 4 居住環境と自然体験の必要性に関するクロス表

変数	出現値	現在のあなたの考えをお聞かせください。幼少期の自然体験は必要でしょうか？					
		とても必要だと思う	残差	p値	少し必要だと思う	残差	p値
あなたが幼少期に居住していた地域の様子を教えてください。	周りに山や川、田んぼなどが多くあり自然に囲まれた地域に住んでいた	8	1.062	.288	1	-1.062	.288
	周りに山や川、田んぼがそこそこあり、ある程度自然に触れられる地域に住んでいた	8	-0.272	.786	3	0.272	.786
	周りに山や川、田んぼなどはあまりなく、あまり自然に触れられない地域に住んでいた	10	0.752	.452	2	-0.752	.452
	周りに山や川、田んぼなどほとんどなく、自然に触れられない地域に住んでいた。	▼2	-1.999	.046	△3	1.999	.046

### 3. 5 学生が取り組んでみたい環境構成

「施設内（園庭を含む）で、あなたがしてみたいと思う環境構成を教えてください。」という質問に対する自由記述を KH Coder3 の共起ネットワークで分析を行った。その結果、図 1 のような分類が行われた。1 つのまとまりに注目すると、「自然」「環境」「植える」「できる」「構成」「行う」となっている。実際にあった回答を見てみると、「動物を飼って、草花を植えて、子供だけでなく、自然に生きる動物たちにも良い環境を作りたい」や「自然の多い中での環境構成が望ましいと思う。」「ハーブなどを植えて虫除けには化学物質以外でもできるんだよっていうことを教える環境構成をしてみたい。」という回答が見られた。

次に、「する」「庭」「園」「木」「山」という言葉のまとまりに着目する。この内容を見てみると、「木とか山を園庭にし、走り回れるようになっていること。」「木登り、昆虫採取、太陽が沈むところをみる。」小さい山がありそこで定期的にピクニックなどを行えるような園庭で保育してみたい」という回答が見られた。

さらに、「動物」を中心に「食物」「作る」「機会」というまとまりもあることがわかる。このまとまりの内容を見ると、「動物の飼育」「動物を飼って、草花を植えて」「ちょっとした畑があったりなど動植物と触れ合えるような環境が欲しい」「植物、動物と触れ合う機会を作る」といった回答であった。

そして、「育てる」「園」「草花」というまとまりもみられる。この回答の内容を見ると、「野菜を育てる」「花を育てる」「園庭を囲むように草花を育てたい」などであった。

最後に、「キャンプ」「外」というまとまりもあった。この回答を見てみると「夜空を見たりキャンプをしたりしてみたい」や「おままごとを外でやってキャンプみたいにする」「外でお花を育てる」などが見られた。

以上の結果から、今回は自然環境に関する質問紙調査を行ったため、施設内でしてみたいと思う環境構成について聞いたところ、自然環境に特化した環境構成をしてみたいと答えている内容が多く見られた。今回の質問紙調査からは上記で記載しているような自然環境を充実させていくことを理想とする回答が見られたが、これは、質問紙調査を行う中で重要性に気づいたことによる結果かもしれない。しかし、環境構成においては、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の『第 1 章 総則』に「園児の主体的な活動が確保されるよう、園児一人一人の行動の理解と予想に基づき、計画的に環境を構成しなければならない。この場合において、保育教諭等は、園児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。また、園児一人一人

の活動の場面に応じて、様々な役割を果たし、その活動を豊かにしなければならない。」と記載されている通り、子ども一人一人の行動の理解と予想から入ることなどは子どもたちの主体性を育む上で重要なことではあるが、今回の学生からの回答からは子どもの主体性に関する回答は特に見られなかった。

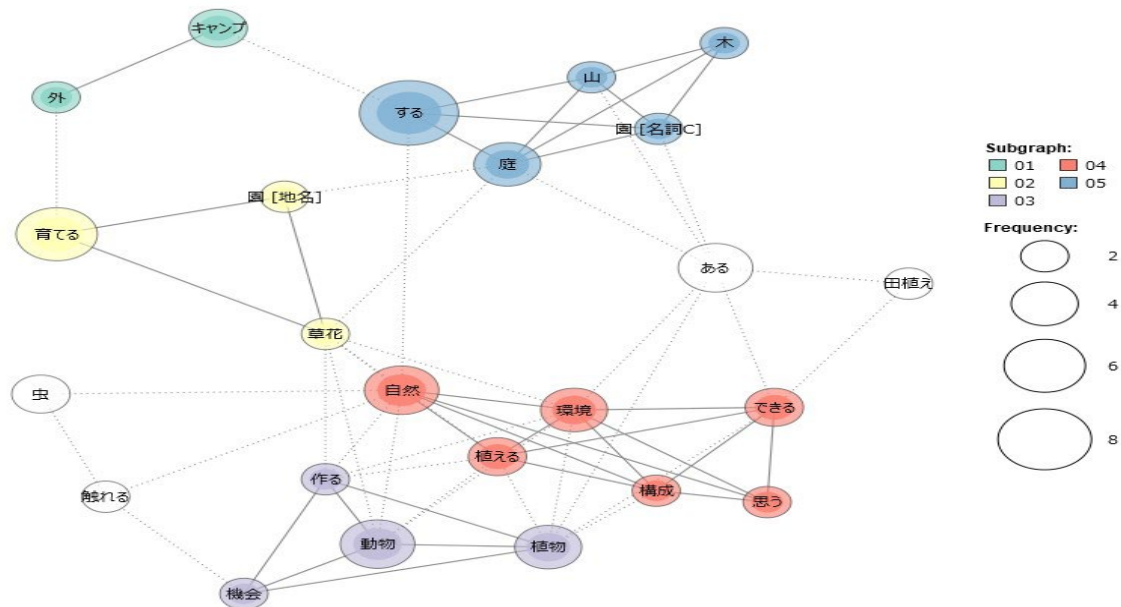


図1 施設で取り組んでみたい環境構成

#### 4. 結論

今回、K大学の2年生の環境にかかわる科目である「子どもと環境」の授業において質問紙調査を行った。その結果、幼少期の居住環境によって、「野菜や米を育てた経験」に違いが見られることが明らかになった。また、幼少期の居住環境によって、「あなたは、「野菜や米を育てた」経験を子どもたちにも経験してほしいと思いますか？」という質問に対する回答の傾向も違いが見られ、自然に囲まれた地域に住んでいた場合、子どもたちにも経験してほしいと強く思う傾向が見られた。さらに、「野菜や米を育てた」経験が「とてもある」学生は子どもたちにも同じことを経験してほしいと強く思うという傾向も見られた。また、居住環境に自然環境がほとんどない地域にいた場合、自然体験の必要性をある程度しか思わないという傾向が見られた。以上の結果から、幼少期の居住環境や幼少期に「野菜や米」を育てる経験は学生になった際、子どもにどのような経験をさせたいかという思いに影響している可能性があることが明らかになった。自然体験が減少している昨今、そのような思いを持つ保護者や保育者を養成していくためには、幼少期からの自然体験が重要になることが示唆された。以上の結果から、今後「子どもと環境」の授業を展開していく際には、幼少期の経験や居住環境を把握し、学生の自然体験への重要性をどのように伝えていくか、検討していく必要がある。例えば、自然体験の頻度が高い学生に実際にどのような自然体験をしてきたかなど、その良さを伝えてもらったり、幼少期の居住環境が違う学生とのペアワークやグループワークで自然体験の重要性や必要性を共有することで自然体験への意識の向上を図っていくことが重要ではなかろうか。



## 5. 今後の課題

今回、「施設で取り組んでみたい環境構成」について自由記述より回答を分析したが、子どもの主体性を確保するために重要な視点に関する回答が見られなかった。今回の質問紙調査の対象者が2回生であったため、そのような回答が出てこなかったのかもしれない。今後、3回生や4回生への質問紙調査を行っていく中で、主体性を意識した回答が見られるかを探っていくことや、授業内容見直し、実証的に検証していく必要がある。

また、対象者が38名と少ない人数であったため、今後はさらに回答者数を増やし、量的な分析をされに進めていきたい。

## 謝辞

本調査にご協力いただいた学生の皆様に心よりお礼申し上げます。

## 【引用・参考文献】

- 1) 独立行政法人 国立青少年教育復興機構「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）」第1章 調査の概要 pp.1-196. 結果の概要「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）～心身の諸側面，社会経済的背景との関係～」2021 pp.1-10. (niye.go.jp) 2023.4.10.アクセス
- 2) 山本俊光「幼少期に自然体験を頻繁に体験した若者の社会性」環境教育 Vol.28-1. 2018 pp.2-11. 日本環境教育学会
- 3) 山本俊光 2012「幼少期の自然体験と大学生の社会性との関係-親の養育態度をふまえて-」環境教育 Vol.22-1. 2012 pp.14-24. 日本環境教育学会
- 4) 高橋多美子 高橋敏之「幼少期における自然体験と自然科学への関心・自然に対する心情との関連性」理科教育学研究 Vol.50.No3. 2010 pp.117-125. 日本理科教育学会
- 5) 井上美智子「幼児期の環境教育研究をめぐる背景と課題」環境教育 Vol.19-1. 2009 pp95-108. 環境教育学会
- 6) 遠藤知里 窪田辰政「学生と考える SDGs と ESD:幼少期からの自然体験の意味をさぐる」常葉大学短期大学部紀要 50号 2019 pp.3-10. 常葉大学短期大学部
- 7) 千葉正 千葉悟「保育者を目指す短期大学生の幼少期の自然体験と「環境」領域の授業への示唆」修紅短期大学紀要第40号 2020 pp.53-58. 修紅短期大学
- 8) 日本経済新聞「虫取りした子，6割止まり，自然体験10年で大幅減 09年度調査 川遊びやキャンプも少なく」 2010年10月14日 日本経済新聞 (nikkei.com) 2023.4.10.アクセス
- 9) 文部科学省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2017 2023.12.26.アクセス  
[https://www.mhlw.go.jp/web/t\\_doc?dataId=00010420&dataType=0&pageNo=1](https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010420&dataType=0&pageNo=1)
- 10) 前迫ゆり「地域の子育て環境づくりに向けて保育者養成における可能性と将来展望に関する学術的基礎研究」平成15～16年度文部科学省私立大学教育研究高度化推進特別

**【註】**

- 1) 清水裕士「フリーの統計分析ソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育研究実践における利用方法の提案」メディア・情報・コミュニケーション研究 1号 2016 pp.59-73.
- 2) 樋口紘一「テキスト型データの計量的分析-2つのアプローチの峻別と統合-」数理社会学会理論と方法 19巻1号 2004 pp.101-115 2004

**Abstract**

It has been reported that the number of nature experiences among elementary and junior high school students is decreasing year by year. Under these circumstances, it has become clear that early childhood experiences with nature influence children's sense of self-esteem, independent behavioral habits, ability to explore, and communication skills. However, each family recognizes the importance of providing opportunities for nature experiences during early childhood, and the number of nature experiences among elementary and junior high school students is decreasing year by year. Therefore, it is expected that the price will not be very high. Under these circumstances, students who are about to become childcare workers should recognize the importance of nature experiences, have a perspective on how to incorporate them into the childcare environment, and increase their awareness of the necessity. It can be said that it is necessary.

As a result of this survey, it is possible that the residential environment in childhood and the experience of growing vegetables and rice during childhood may influence what kind of experiences children want to have when they become students. It became clear. Nowadays, the number of nature experiences is decreasing, and in order to have a stronger desire to experience nature, we should focus on the living environment and nature experiences and encourage students and others who have little experience to actually experience nature. It was suggested that it is necessary to communicate its importance.